美濃陶磁歴史館だより

美濃陶磁歴史館　☎55 1245

連続コラム

―光秀の源流を探る―

第5回　光秀と妻木氏①　妻と伯父

天文21(1552)年、斎藤道三の国盗りにより明智氏宗家は滅び、道三に味方した妻木氏が、実質的な明智氏宗家となりました。この頃、光秀は妻木氏から妻を迎えたとされています。今回は、妻木氏の出とされる妻、そして最も近い親族である伯父、この二人についてまとめます。

まず、妻について、近年の小説によって広まった「煕子」の名が有名ですが、実際の名は不詳です。17世紀中頃に書かれた『美濃国諸旧記』において、「光秀の妻は妻木城主の妻木勘解由左衛門範煕（つまぎかげゆざえもんのりひろ）の娘」とされると、『明智軍記』や『綿考輯録（めんこうしゅうろく）（細川家記）』など、後の書物で踏襲され、さまざまな逸話も追記されていきました。しかし、それらはいずれも物語であり、その真否を明らかにする良質な史料は見つかっていません。光秀の妻については『兼見卿記（かねみきょうき）』などのごくわずかな記録しかなく、実はほとんど何も分かっていないのです。

次に、伯父の広忠について、一般的には妻の伯父と解釈されています。ただし、妻の伯父と書かれた史料はなく、妻木氏が江戸幕府に提出した系図の中で「光秀が伯父たるによって」と書かれているのみのため、実の伯父だった可能性が考えられます。広忠の記録もやはり少なく、その実像は不明瞭なのですが、妻木氏を興した頼安の嫡男として、永禄2(1559)年までに妻木氏当主となっています。広忠は明智藤右衛門（あけちとうえもん）、息子の一人は明智三郎四郎と名乗っていたことも知られており、妻木から明智に復姓して明智氏として活動していたことが分かっています。

天正10(1582)年6月18日、光秀の死から5日後、光秀一族の結末を見届け、西教寺にて菩提を弔う手配を終えた後に、広忠は自刃して果てました。光秀にとって広忠は、後事を託すに足る、最も信頼できる家族だったのでしょう。

広忠が当主であることを示す棟札
妻木八幡神社蔵（土岐市指定文化財）
永禄2(1559)年

広忠（清閑院殿一友宗心居士）の位牌台座
崇禅寺蔵　天正10(1582)年

台座裏墨書：宗心逝去天正十丙午六月十八日
※丙午は壬午の誤り